



横井孫右衛門藏書



十訓抄下



第八可堪忠平請事^ニ又第九可停^ニ懸^ル事^ト
第十可廢^ル事^ト

第八可堪忠平請事^ト又

或人云法の事と思ひ忠平人ハ下らねども徳ガ^ル一
人の忠平は法のあ^らも事^トの思ふは是^レト云^フ忠平あ
ら^る一^人の成れとよ^くま^るの若^クは^リと
ま^るら^る忠平の世は^も三^つら^つら^つ十^年中^トは^も年^々と
忠平の^ハと^思て^は道^ヲを^学ぶ^ハ忠^トと^思て^は若^クは^リ

家をおろし成とまゝのりりしをすしんぬれまはれ
事よ付くはつて物よそへ之悪くも也人ごまの
ゆをそりしとらと五の徳あり人ごま其戒十善行必
付くしつる此罪と夫も法とせり一切の罪におりしこ
と物よ悪えぬらうす本也此れしや源信僧都曰十
一十條起請第一辰雖も不計心事思患念不起慎
恚とありし物よ此の行成と仿も七賢位れ中よ忠
位大なりと云及の中よ忠辱波羅蜜大稱し十地
よハ甚患地を号し證果とんし無し患た云釋尊
との徳患た名けしとも羅睺羅尊者者忠辱第一

物此故しや唐よハ多の直しとく忠と云文字と多
て身しとらる人らりてあわさる斬し中しとら化如
る草すてしめりかるといふと此の草と云し
ことそ中しとらるはあわ草と名けて為忠辱草
と云文ありしは毒草此因らも通ぬる毒草と云りて
あれいしとらあわらるの類よハあしす法師ふの加
刀杖を石念佛故應患の文と云草よとらとく寂念
とらあり

初唐
源三の末に意テ爾よるるは母をばれしはなり
不輕の心を以て言詩し

真如珠上ニ塵狀禮 忠厚ノ夜中右法強

五帛中將のほのこのまんと一ある哥の酒はおうく
周防内侍の家人の三つとあつつけるもはゆり花
園に大は草此のうらは付てはの意とあつつけり花
はゆりくはゆりいひはゆりと思はてあつ草
のふ也

○大納言行成つひまの殿上人とてありけり時實方中納
言の憤りまも人殿よき事會て三年もあつりた
の冠とみなりくふをもちもすくもあつ行成あつは
たすししこのふりむとく冠あつとあつとて遊

てまの刀よわあつる貫あつらんはらひとく
岳五つくつあつまるとしてん恩よあつ冠の礼冠
よ殿方つまんとてえはゆり孫其あつを兼つまはの
まるとはゆりつとんとつらつりくいとわたり實方
しあつけくはけよあつあつとくまらつら上
は實方とて行成つとま者也あつとつあつ
むいをも思はつらつとつまはゆり孫人あつとつと
けりよあの人を越えおされまらり實方を六甲おと
めとて争抗及くまねとて陰奥酒よりつとつと
けりやるとつとつとつとつり實方孫人願はつ

てやうにけりなを恨を扱ニウくするもく葎は殿上
の正室盤は垢て正室盤とくひけるゆ人きあり一人
不忠よりわく希達と矢ひ一人の忠信するより
て腹は是よりあへるをくわたり

公教の相圖實行の

③三條内太右衛門の客入りまの通をいふまうてとくをりける隣
よ公重十将のわくまきりけるが此殿付と物を云わ
りて大つてよておける侍の格をとりてあらう
くおけるをけし客入をまきりけるよ人をな
きりおけると同也おれ隣の少将りるる事
まかりおゆるをわかれうらまきり客入は内入

せは人あやうりておるもて家し入給あり又は
おきるとこれの賢くそとをわおきくこれのわと
り給りす物治しとおきり上臈のくしては又おれ
いし〜くまおる〜人世と其客入の給もたは
世ははるまゑよおりすとや〜の中えや〜此殿下
よ道心のおり〜けるともや京極大納言雅信のい
腹の〜そいつをぬく〜をくらつめくぬらして
けりよはぬ給ひきりける人也

右本長政房三男

三條の内

藤川院太子

神中納言長實

④高陽院の非君とやし高羽院の正室め養福門下の
正室也此言の所まゐりとてよ高先とてよ給あり

まくろぬくわかれさせぬけり言の成り口歌のうすくも
 るりりけりてのりこの夜く〜集集をらりけりよすの
 月と柳と人のり〜中納言成茂〜
 手取と人の母〜
 と幸〜ぬといわれり物を歌く〜
 あまらけ〜
 男と女〜
 らとぬ〜
 音ひ〜

④ 西行法師男乃けり〜
乃志の孝康清子俗名純清

うりぬりけり重く煩ひ〜
 水面の者たらり〜
 心ぬすの〜
 耳〜
 西行法師〜
 見合〜
 心ぬ〜
 大皆物〜
 心〜

う物類をさうしとて又の陸の里さうさうさうさうさうさう
 とすめしむた二日百あはれはすしなはらうをけさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 く思ひつゝさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 人の中にも其方れすむいよつけくむむくむくさう
 々としてさうを孩す世中さうさう後冬無虫毛詩の喩は
 すす物類さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 一一さう思ひつゝ天曆女流安子さうさう宣耀
 師尹女母さうさう
 撤の女流さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 けりよさうさうさうさうさうの君達もさうさうさうさう

中園の通隆子

右府教實親王子

伊周公

九条朝臣女田融院の母

小糸丸大食

イナユニウロキ

伊周公

右府教實親王子

中園の通隆子

伊周公

まんげりさうさう又澄お大納言の雅信公代に女の人儀同三
 月此語よさうさう花山法師と射すさうさう兄弟たう流環
 さうさうさうさう此道はあわくさう思えさうさうさう
 さうさうさう妻世継はさう
 重明女伊女貞信公の女天曆女流
 斎宮女流長考やさう利はねさうさうさうさうさう
 けりさうさうの次わりさうさう
 伊周公の御さうさうの御さうさうさうさうさうさうさう
 伊周公
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 是れがさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

①大和國の男ももりふれ妻しあを爲くありし
其をむく月はふれた母妻あしめかきまよりく
りり枯の死れつくくはまのひれ極よとら
ろくとふれ妻よす給やと回されり

あはれとて人よをわいと結よまはあうとたけ
男ももりぬくそく今此妻と送るにふれ妻とすま
業半中将れ高安へ通けり御つつけぬる守又も
て買れぬのこくあしそくけり極よまはあうとたけ
ろりりけん夜ふくもて極ぬくそくをうもつて
凡ももり神つる波音にふりて老るるわいと

とねりけり傷よとくまきまあり也男本裁の仲よ
あられて母妻をうらうらつて外心若よけりといふ人
とい佛も内心如夜又と作しきまの六年うの心けり
してはあしんかまもあはれよあはれよあはれ

⑦朱實は文の通らりてしるも家もつしるあり
年は此妻極危くぬとよよとてせよとてとま
あはれとてしりて別より去りて年買は古里は去り
のたもは厥く赴く時彼妻國の民れ妻とありて買
たよとてしりけりぬと悲し消入よけりといふ人
呂尚又妻同く家をすし危く別よけりといふ呂尚又

玉の師と成るべし一りもあつた事とるよ見なく印の
しくわん事をとこのまむ其耐は品尚又桶アを本
おて是よ水入しこまもいはいつこりせとらんこりけ
ひさく本のわしはははしこり耐事だらんまよこ
わせり水つそり込しめんよ品尚又云海家は縁つ
き一幸桶の水とこりせらるは同一と受りてり婦と
すもんとそまけり此も物縁しこまあし縁元貪まを
とまひえんこりしつこり類也

第九可停懸の事

或人云人の心はあつた事一あれしことおすこの心

もあれあひこし一しつしわれ物服れよこまき也
そしつひ理運の事一の相違しつこり縁束れ首の愛改
あつたそしつら極しとあつしつと心承くあつたそしつ
ひつら縁の服と下りも中しく極しつこりつとあつた
えつたへつてあつたつた物あつたつたつたつたつた
てつたけりつとつたつたつたつたつたつたつたつた
つた事とあつたつた老子のつたつたつたつたつたつた
者つたつと服つたつたつたつたつたつたつたつたつた
三系院中子 信信
法務大僧正 長安寛助 右 年 所 所 子
仁和寺大内室四所成就院僧正のつたつたつたつたつたつた
げつたつたつたの九重塔僧正のつたつたつたつたつたつた

賞ありふ必譲らんとしゆ物あるもあれは畏り給りてふ
思のこしく借養逐くもく賞行りては時成く京控
大敵の臣子と河因梨とては弟子とては給あるは敵
臣對面の時も今度の賞は小法師とて給りては兼
てしりし候り給あれは作らまては方おくと法眼
は成給りまなり此室は河因梨のふは借し思らんや
胸ふとつて思合けりは其日とて思はるもあれは
さうらん若修行はあつたふううううううううう
とお月しり丸きううは日高おりては本はあつたけり
よあやしくおるうううううううううううううう

と作らねあれは新法眼の臣杖ひまううううう
おゆえとてつゆも恨もさうさあてさうううあ
此室ううううううううううううううううう
まよあれとも次への勸賞あまき譲りて僧正を
おりては多相院の時討はし佛と思はれ世を家
まうううう法師國師とていふれ給りやうう

あつてもあらん也

美濃と隆徳りり中ナ頼住孫

○六条修理寺住持の事義子なりあつたまの方よ急川の末あを

あつと館に三席住持義親先坊けあつたをいふなり是の理を

これ八院より給らるるおくれ坊とてあつた

よりらへて運軍をやりしけりよ攝政の如く世間計の
きく行幸のほひ納言等と付放云々といふ貴國
果進家字は任きりといふりの結て入給より攝政
ちよりりて門をおく車よ業として先翁と車よりけ
入られ被りて二河よ成よりりて靈よ成く攝政逐よ
夫給り一條攝政の子孫別成の靈宅よ入らりける三
系東洞院とそわくして恨深よりけるサイコウ系業の周マキ
わくしそ

堀河白氣通子 三系院のよ 号堀河女 顯光の女
③ 顯光の女は一條院の女にありきいよ依りて正堂周白と恨
よりりて惡靈と成て一夜の内よ悉く白髪よ成給りて私

いとあきらけいけしは雲後の息よ吾とけりて頭よ愛一
け人よ恨あつてさけりて

大相國の光息母敦敏女
④ 齊信民部卿の村才幹すよりりて兄の誠信の
君と越て中納言よ成給りよ誠信系成のうとて
忘て指當けら恨よさすは情と思給りてけりよとせ
日よらよ恨あよ死給りてよりりよをよりりて死給り
う心やつよりりけ人持の丸ツグミ甲へ通りてよりりて身よとら
車帝王下と給りて其例すかうて予忽よく
一しよとらうておそる

三系内大臣の教公の子實綱中納言弟は悉く遠野良房

實國^のとよ^く報^くま^す

いふ報^はむら^かむら^かく^てい^はれ^んん^んも^もむら^かむら^かの^この^こ
報^はむら^かむら^か人^も恨^は涼^くこと^おは^りし^りめ^たの^めら^りこ
と^はる^りり^こ誠^信の^目前^は恩^報の^報と^感感^ずり^し報^も
むら^かむら^かく^て是^の也^ま

顯基中納言

のつ^ひ糸^ハ果^りて^配不^の月^とる^んん^やふ

と^ささ^りり^よハ^能能^善知^識の^次と^える^りり^成
と^立立^しく^報し^りく^と善^益の^事々^是の^こひ^りり^す寛
算^う雷^と報^りし^清和^の前^成の^法花^經と^恩報^は回^向
せ^し恨^の報^は此^の也^也

朝綱丹徒守正

後^に相^公の^啓明^よと^られ^て後^世と^前ま^げる^領文^よ

悲^之亦^悲莫^悲於^老後^子恨^之更^恨莫^恨於^少先^親
と^おも^ゆ報^は後^相遠^れ恨^げは^ささ^りり^さり^りさ^りり^さり^り
是^も江^淹の^恨の^賦は^平原^よ人^のお^りひ^る草^骨骨^小
ま^さら^るる^を松^木魂^とあ^らじ^氏せ^しま^らる^ると^天道^と
よ^漏せん^や僕^りり^りり^恨ら^る人^也報^は報^く事^やま^すり^唯
い^しの^人乃^恨よ^れる^死と^恩を^あら^りし^との^こ
く^表報^は加^く唐^帝の^楊貴^妃は^別恨^ハ長^恨の^事
と^文文^名よ^わり^りり^漢皇^の妻^は人^よと^られ^り報^は
え^りり^りり^骨骨^化して^報は^らる^る大^報報^は

くまなく消る朝ふくんと樂府よりのまことついでに
中へく丸味宵の中此恨あふくつてをいふに
ふたつ——よあふの夕暮のやよひ更けのこのまことす
よふに——くあふの夕暮のやよひ更けのこのまことす
のまことす——是れは愛著中アイヤクの業ねをたまたま
そとに成のおぼしめて此恨よとついでに類古今ねを石
の品類
乃てあふくはくん事希ある

⑤ 邦人同れハ昔の中ハオソウエ怒憎會若くはあつたおれうら
——と世間ハ大目もあつたをいふに況んやその
次下とや然く心よものうらみの事世れ習そくと思

あつてはくはくして愚かき人理をくらとす持ころ
恨のあつたあつた心よものうらみの事世れ習そくと思
くれく入ころりや家をすくく怒をあら熱あつた其道
心をすくすく通るおれくは浮きし學をたらしけてと
いふあつたあつた心よものうらみの事世れ習そくと思
すくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすく
頻に催して或はくは世よお越すは人或は高野粉川
のくれ——ついでに——ゆまわらくすくすくすくすく
くあつたあつた心よものうらみの事世れ習そくと思
すくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすく

く先ゆりやうり多うりはのり人のよか思ひにふる
西り年一よ

榮のいほふ成をいふりあをいふりいふりいふりいふりいふり

とよめうらうけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

橋逸勝子三通う成の沈めら事をはく異國へいさくう折れ具

年親り家の作文序書うらうけらよ是とくうらうらう
思ふ人

齡五顔駒過三代而猶沈恨同伯瘖鳥テ奇テ五噫テ而得テ

とよめうらう原者悪其府よんけらう此うとあやうそ

心通思んうう仕つらういけいけいけいけいけいけいけいけいけい

思けん法とあうありそそまうりあうまうりよ高懸へそめあ

世を思まう人よあういそいそいそいそいそいそいそいそいそい

して宰相よあうれよありとほよ中えあり

● 近は鴨社れ氏人の南守長明と云者まけらと和哥菅笠

の道人よ知まきりりけら社母とあけらう不叶もれい代を

恨てお家うては母くまきく世を背ける人のい

とやうけら

いづくより人い入もまうり系林凡ゆ道りそ

海と恨の心うらういれ速せもれと此思とくしとる人

して實の道よ入とくしとる死涅槃と向く頓悟并然

八年まゝとてはねしむらゝ一棒らびりてみくしねるれ

何れを思ふしつゝいふに又川内守りおしめてあれ

わらもれに此の世ののしく招く長兼二年九月の事

大治四年ヨリ長兼二年三十四年目也

相より中納言よるわらゝり宇治大納言隆國も中納

言より大納言よ成例とて其なすつゝと昇進してを

政に長兼とてのちの給しと世とらわらり人とも能

くしつゝわけるを也るやうにさういふ事なれぬ

とよらゝらわら類もあつゝうらゝるゝ大納言二條院灌漑の事

り

長兼は若者のあつゝ思ひつゝいふに長兼を招くこと

とよらゝらわら類もあつゝうらゝるゝ

身十寸廣兼は其事

或人よなより其道くの家のせられぬれははら

るゝ類もわらゝるゝ付ては能は必るゝと也申して

氏をうけたる者落しとらゝるゝとて氏をうけたる類も

道よあつゝうらゝるゝ類もあつゝうらゝるゝ道よいゝうらゝるゝ徳もあれ

氏とつゝ人ゝうらゝるゝ道よいゝ人ゝうらゝるゝは是とていふ

けいゝ何とらゝるゝの交つゝうらゝるゝわらゝるゝは

それ大藏は徳もあつゝうらゝるゝは是とていふ

遊ひゝうらゝるゝは是とていふ事とていふ人ゝは

此河らして人目さしきくぬくはく成りて
果もあれあや一きり能あふまきしよありの
おんまらしむ思ひのかりきさるる花の
このさしりふのあふんよきし人おくさあ
まの目すくれまのあしきりはよきし
物さしあふの白さしきりしこれ花
は且れ常花也松樹は千年の貞本也と
しあふさくこの能わさし人あふん
能あふと思あお世況も能よきしぬありの
とや何況も同様さるる一人の能あふ
一人の能あ

さしあふ中し世中れらりひまき
よあしりしひはけつ道くのまき
初よひまきあふんはまきし
とまきしは希也とまきしは形あり
此業とつひし人おしりぬ

○中納言左衛門督伊藤三三郎中務右兼明親王

子あり村との口討返くらはる同の上作
改官の常は何事をもせし一伊藤三三郎の
しつしとるるあしき常はあしきし
とまきしは定て侍しれさるる人

作事あるもいふくはしき月日討合つる文を二巻
りてまゝにたしむるに書おぼふべしありし
けりよ文おりにしきとてつらとけりよ君臣臣
諛つるを去所ナ懸くまのあつて文書其間足と不
知ぬおぼくつとつとけりよ藤原の人れまゝしめり
人ありまゝけりよ荒巻賦と云ふとらまゝしめり
はつとけりよ

菅三田息
菅輔昭宇多院は花人補して試のころは蘭花
途勧酒とち付し賦て輔昭をて序者とす嚴
園は助成とくこういふと院門とくして作反て

ゆり科此序の自謙句云

サカキ
折_三於_二孝門_一之波_三二年朝息未_及ハ

踏_下於_二蓬壺_一と云_ラ十日夜飲_二酒_一

とそおちる人足と秀逸とす又の文時に踏蓬壺
之云と目と書へ一指と折ておちけりありと
難しけり餘の事お初業とすあか事は伊勢
心よお似けりあり

菅三田息
席堂開白大井河とて遊は寛の附詩哥の如くか
て名堪徳の人ととのせしきけりよ田舎大納言と
作しきく云りつれの舟よのゝちまやらねや

此亦よのついでとてのしるすやわらへく

期^しつゝ凡^ののふりきまぬれお葉は薄きお人そむい
ほよつれけつらつれのみよのうきそと被作しと
そゆをわらせりわらふ又詩のよも葉とく是の
詩をつらとてつらぬあやてすしとほ梅とらけ
り此奇花山院拾遺集を撰りて給時お葉乃
をとおく可入也被作けつをよと被ゆりとらぬ
ゆのまうよ入よけつと又圓融院は時大井川道遠
の時二毎よ葉あはわらふ

④ 師民部^{敦實親皇代孫}の經信^{又此}人^はお^とし^らつ^らり^白川^院

西川は行幸時詩奇管弦は此のよと流つて其るを
のんくと命くのちとけりよは經信とよ葉とらるお
よの外は流すよ葉ありけり給よとららわまされ
て來りてきりけりつて葉と無り人よとけりよ
まのよとくわらひこのおよまされよせらとといへる
つげり時よあつらつらりわらわらふいん料り
玉葉とよきけりよとよとく管弦のよよ葉とく
詩奇と被とよきとらつらりこのよも葉とふ
まらわら

⑤ 後三条院^後行^幸社^は流^幸る^にけり^時經^信の^序

代よきしむるなりは其のよし

沖つ名鳴まうきねは侍の松乃えつえとありし白浪
當夜のきき哥也はなほ侍は後物類をさういふれり
る古しよいれり躬恒の哥は後書のおを松をせゆり
「急うらそめる沖つ名波此の侍はた大食人日和哥は
泳の沖つ名の哥中門の内よ入る史書の饗まつき
やと後頼云此作は何は哥合とくかへりす松而古今
此哥きよるよいめて有限て先任太長ひりんは自作と
一の大納言とて尊者とて南階のゆかりのゆかり
對座よ振りんとておぬりと云はるふらしてあるらん

やういふ人として感氣をさすなり又自讃云躬恒家
集哥多り方中にも松を松凡のききおれ八年を
きり胡人の錦の帽子をさう又八比色をねり紫檀
の脇とよとく詩と兼り備て眺をさす
おる此人は白ひてありきつらひつら我沖つ凡の哥
こそあまといふれり人乃成子の一徳の揚るいふ
るおしよは此人とよとすすめり英才也故能れ始り
強く

⑥ 都良香竹生傳よきまるとけりし眺の心よすくそ
三千世東眼前盡

と云句を作く其事を案得はるゝもれハ靈天詭宣
と下して

十二因縁心裏空

一句と加へ給事り同人羅城門とる事とて

氣霖風抗新柳鬢

と詠一きりもれハ樓上より色あつとく

水消浪洗 舊苔鬢

と川もきりもれり良香菅丞相の所前とて此の
詩を自償一ヤもれハ下の句ハ鬼の洞なりとて
被作ける

七 世中一もれハら初りて道人サるりけり此菅三位家
の茶子もれハらもれハ教十騎歩立てり人するもれハ色

わらもれハ菅平のまゝ人とお月一と人隴山雲暗とわら
ハ此家もれハ一いそく信形もれハとておるめと人の夢
よんてするりけりとて其家中ハわら此下人よりもれハ
つゝかりけりけりハ信慎と此大将と禱けりけり時の表
文也

隴山雲暗 菅將軍之在家 穎水浪雨 菅征虜之末社

八 江都督安樂寺にて東水宴行りれもれハ自序と書共一

句よ云

堯女廟荒春竹深三掬之淚三徐君墓古秋松懸三尺霜

九 近八建保の比菅長貞字佐之勅使とて下向の耐安樂寺
は請て作文の遊との入ける自序と書きたるにける

青雲入半遥持使節於百萬里之西

云一風深心泣絲祖廟於十一代之後

此句と詠吟の間文人よつたぬれは相官等涙と物

多り神と定て所納受をけん

十 徳因入道任孫也實綱日野三後實成子付ひて故國より下りてける

復初日之くくくくく民の欲流くはりけるは神

和哥よめてぬお也試よらんは徳よもつては國

月頻よすしめけ六

天河萬代あよせとてをあまのくさるよまの神ありは神

とよあふとととととと書くは神とては上よせけるけ

とハ美早の天娥よくつととととて入るる雨降はてたる

縮葉をくけん縮よあつとよけと思は天災とやりく

幸唐の貞觀の太宗の蝗とのあつて改まよととととと

は徳因ハぬれるすこの也

都との辰とたよまよと結凡とあく白川の閑

とよあつとけると都よるはつと世奇とあつと念と思

て人よもあつとす久くくくくくわて色をくくく日小

あつちのあつちしてはほろりのかたへ修りの道すゝもよ
そはちを修りしあつち

侍賢門院女房加頼と云寄りよしむるなり
公賢女

と云寄りと年比よそりしとけりと同しくはかへ
よまむしれくよすしと云寄りよしむるなり
と云寄りと年比よそりしとけりと同しくはかへ
花園にわづらひし初てきり思のそくよ
此のよまむしれくよすしと云寄りよしむるなり
ゆきとすりしあつちのくよすしと云寄りよしむるなり

ふし葉の加頼とそりやちの世因の振舞よあつちて

ア

① 中はたけのめききりやちの世因の振舞よあつちて
ふし葉の加頼とそりやちの世因の振舞よあつちて
あつちのあつちしてはほろりのかたへ修りの道すゝもよ
そはちを修りしあつち

くしやうをまいつらよ流やうは流東林と後日同なる
まの流なきよ思半かたは孫流くううとていふこと
くなく非流かしくまきくうううの道はうううとてや
りやく

成れうまを中り付らうう水思ふ心をくそを知ん
とよみきらるもれん母し能くく物しりううと
下向するよ七系朱蓋たきうとて世中一時の流敷と
人あつしうらよあそくくぬ流の流あをううとて車よのせ
てまそよあかうとて流流りうううああり

●和泉式部う男のくれくかむけら流貴舟は備をる

けらよ童の流をく

おあひんはの童も流たああくくれあむしをら
とちりあもれん社の西ううあひらうう流うとてあ
きううけりや

あくしよをまきうとてまら流のまのま流うああ田んそ
うのまらうああけらうとて

●同式部らむよあめ式部内流母世あう守流のあありまら
よりわくく人う流あまらうう流ううあありてあ
きりあれハ和泉式部側よそらうくまうのまをい
て流あかりよ同をうううあけく母ううあをけく

とてわのうすや一葉まむましく由室殿よとて
つけの夜を羽法宮の時夢よ清後する根よはけ
とくらんらんねとねま第一とて清枕よましくやと
物とまのせと赤いお節の右廻馬場の物とて物
りてつとまの物つは使結てかんせめんとす結と結
布しめてお結とねく天祥のんてさせ結つらぬ
ら由葉のあつとたかしくまれとてる羽の由まの由
馬よ小西のまよのせとくせとせとて被作まれの池と
糸てかふるよ小大違へ雨志つくと流るゆかり清茶
よ知のうすやうよ書つる哥をみく是とねて糸る

けつよまきしまらつたぬさうまはるが殿南殿の茶よ
けえくつら清夜とつとてさきをな法舟まのまを
と志まてまつて侍覺門院まきつとねりけるから
とく柳子よまほひて糸をさかして天祥のあつとま哥
よめてまを結つとけらとつとて結まじつと大進と
なめれ共つらりつとつとまの事心さつとこのまね
しめつとねのあれとまをてやくと仁和寺つらるま
筆振よけりかよとまをてま地とつとつと一員
思つと鬼作よま夜と思つと古今の席よまを
らひつとねのねつとつとねのまあまとあれ共はのこ

けふは六耳らうきうきうりともさうす

大納言吉宗通子

成通の野曲は徳重流るるさうりうのくはあうりあうと
せん久く煩らうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
けうは此人仿まかりたをけるをみたくきうきうきう
とやうあそびんかあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり
さうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
せん年きうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
世のうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
薬師十二は折雲初八夜病悉除りきせりき
一経去耳はけしてよきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう

とせん中うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
しとて思てさあうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり
幸うきう

津市原天白吉野川のきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
臨時神女是よりきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり
不断とよきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
舞あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり

し女子のそとをのめあひのすまひをきりておまをてし女さむ
よとのあま通女とてけりしきしあひなをいひせよとのあまの神ふ
ろ山とそむかんとては是より始也

⑨ 村と帝月あつて乗法源殿の上の山をたて水牛此角
の扱てそを象を引てしきとて只一不のりまけ糸
糸のめかろ者空よりあまきく孫願よりけりけり
何れとて同じけり大唐に琵琶傳きあつて劉次
席廉正武より傳り只と此空とて傳つる清比色は扱
音のりきりてさきあり不也恐くい貞敏は扱のり
兼和遣唐使大唐
開成三年九月七日於楊列國寺北水館逢比呂曰廉兼正武劉次昂生年分北
曲のゆかりと授きりし人なり

晉書廉正武為筆從三臣刑の繼彦子參議從三臣實
まして比色と扱つる

し廉正武の比色は傳る貞敏よりいひて秘事の内は
傳りてり終夜に活活とて上を右上の曲と授
きりしより折西宮に大月月の夜比色と引けり小
座兼武の靈事あり小女は付て秘事と授りてり傳
きりしは靈事ありていふ事ありてり

定頼中納言法花持とてしきりて独居よりあ
よ陽勝仙人に來れり事例あり
⑩ 博雅三位月のあつてけり夜を夜をてまき花の
茶をけり終夜節とて夜をけりてり

人の笛吹かれ八洲人の思ふより其笛は此世に
くみぬくそとく中えぬれあやしくて近きありて人
けはふあひぬ人ぬりけりやあやしくすうれも云
幸なりや此月の東毎に行わぬ吹事夜は月影
ぬ人の笛の絲こもまてこりぬれは試みれをぬそ
吹かれ世よりそ箱の笛也其は初月此月あはれ八州
あゆむ吹かれ九州の笛吹也一そんたいとあはれは
承くかきこむまよけりて三位あはれは帝此笛より
て附の笛吹たり少をせけるはた其言と吹あり人ぬ
りあり其は津藏まよひに吹るをあらはしてふ

名はたは三位よとくはたは帝に感多く此笛の
くは藤門のまよとて吹るをけりてそまけ津藏に
不よりてあけと被作ぬれは月の作のよくはとふゆ
まよ此笛と吹けりはたの樓上よまよく大介方青き
程りらりらるまよのけりとかくと奏一ぬれはとく
鬼は笛と云り一めりる葉ととまけて天下第一の笛
なり其は初月にて津藏入道屋の笛也成りけりや
治平等院と造りて世にけり附に此笛は納められり
此笛は八葉二あり一は赤く六葉くして初毎に吹て
くと云傳へられぬ京極殿の笛一けり附に八葉葉を
甲治平四子師實

忠實後三事殿師道子

はのりくさくしけりし富家入道殿くさくせけりしを給ふ
ん白帝圖礼轉師子荒序是を白秘曲と云それ子也
らす秘すく六萬秋樂の五六帖也信此寂物ハ青葉く二
大水龍小水龍頭燒雲大丸是亦也名子一りて名由清々
とい元長とれ略す

●八幡の樂人元正當官領御伴國吉河保系下向一と上
洛の間持せられし心辨遠礼如也斤鬢實雷れめく愛奇
異の思とりて要より下りて吉備宮籠直一居て云適
當國より下向其曲と云るるよりて宗と云けり亦也忽
押御ては社よきて白帝以下し秘曲と吹間白髮忽

かの女一七道の眉目と云一

●備中守政長が神祇より下ける時則ち正實時次貞形と云時の
舞の上は共といふおひもくさけりよ吉備津宮の湯茶
とて則高陵とて舞ける時は室敷大子四十とていひ
て初めとて一りわけると云らるる集りてとる者大勢と
はんとげりて正實時次貞形と云り思もろね利意
く舞とてとるひとくめとて一息も室敷ひくさく給方
いそ糸一但家来と云路と云り人より若此時志るし
かくはいさき初めと云思く室敷より白ひて流し
初めより後に入ると後者舞けるは始より増り所

まうよ室敷ゆすりのいしめたりしころをわ

◎妙音院大臣敷尾張國はありしころけり時夜に執事文
よ系給けりし百滿けり秋月のくらまありけりよは色と
引すまうて彩へしと世作文字業と云朗詠とけり
けし八雲殿あひそくしゆのまじり世の末の道
極められたりしころをわ

◎建仁のはたき寺はくへき系をとりけり時舍利のおを
りぬ半しりし衆の合とてせし人をのけりしとてし
けりしを給けりしとけり寺僧は中老をとり人のけり
しと世中しは給ありしとすしとありしと

云よ中納言通とすしし人かろしをうしひそるとも
合利のしを給ありしとてしとありしとすしと思
らねしとあり

◎南都よ森の所ありしと和博士信遠と云者ありしと
しと還城樂と云森よまよつしとありけりしと
いしし人よ教ありけりしと病付てありしと
ありしとねは信と云森のふよとけりしと
ありしと其系と云ありしとありしと
しとありしと思しは系家よたもれは妻子親類
てありしとありしとありしとありしと

うくは助あつひけりけりしはゆきよ一人心ちもまきまきり
 語くは吾妻魔は言よ来て罪定しつまつ一人の眞言
 ちや一日の午の舞の所信遠のし還城樂と傳りけり
 其身をなまじりていとなむ古遠くと舞を傳りけり
 口をなまじりていとなむ古遠くと舞を傳りけり
 且て是れ常樂會は舞仕下して出さるくと思つる
 日よはまおつる也と流るるも者共收くあはれ
 くわつるかりまるともあつるは此舞と身子は傳り
 終く又夫よあり才子とい上府せまきるともさけり此
 時遠の先祖は舞人の家は還城樂の面あつてさけり
 少くあつてとくらけり市裏は是を傳りけりとい南抄の
 室也といとよはは言よは道とまきくせしつるこ
 とあり
 一

③ 伶人助元府役懈怠のまきよりて危を府の下念よる
 筆らる此下念よは蛇蝎のすむらわをこ恐とわすこ
 しよは夜中しつるわよ大蛇棄のめくまねりて頭は被園の
 柳子よゆると眼へるまらけりていとなむ三人らありけり
 舌よあつて大蛇をわきと改よのものといし助元魂
 失おつていおつてく腰から帛とぬきて還城樂の
 被と吹大蛇ありといとつて頭をさくくわけて

えりくく節とすまききとて返りてまよけり

◎和達郡の用光と云樂人まけりてまた此の舟遊よ下て
上もあまよ安藤園の舟りて海賊押せをま
けりてあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
けりてあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
よよわてあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
孫の舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
女りあひあひまて孫の防敵よ力ぬけてと心
えあれあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
まら孫の舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心

各あまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
てりてあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
あまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
昔語小ことぬす海賊あまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
ゆりて曲終て先の工急とて君の舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
あつた曲は色よ涙あまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
けりてあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
ら皆管絃の徳りり又此事の鬼神の不感よあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心
また命と物りまて孫の防敵よ力ぬけてと心

◎天曆の正時代明親まよ延光と云人願とてはあまの舟りまて孫の防敵よ力ぬけてと心

よりサレハ氣又ハ遠事ノ如クテハおけりハ或時
いふよの心よりおねまへもれハ思ハれハて入
も年々ハとるもれハいそももれハ入ハ年ハ
おねまへハそのことハ措事ハおねまへハ雅
云々中ハ作ハるハ文ハれハいハあハるハけハ
さハるハけハいハ思ハれハれハれハれハれハ
去ハるハ人ハさハるハハハハハハハハハハハ
して觸遺ハハハハハハハハハハハハハハハハ
けハ雅我ハ仕ハ人ハハハハハハハハハハハハ
有ハ作ハてハハハハハハハハハハハハハハハハ

鶴鳴九皋序也

望廻只翔於蓬偏鹿林東蓬思控御於茅山霜毛徒老ニタリ

同長門守長監子字橋直幹ハ氏部大補ハ望申けりハ文ハハ自書て小

野道風ハ清書セハるハ上ハハハハハハハハハハハ

依人而未異難似偏隨代天而授官誠懸運命

那ハ述懐ノ詞ト書テハハハハハハハハハハハハ
甲けり人ハ是ト思思ハハハハハハハハハハハハ
幸ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
鈴麻以下ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

をりける

兼家 九条殿号法真院殿

東三條園白茶太政大臣九月十三夜の月よほそりて
東小院の念佛よ糸結きまじけりよ夜すまそく世中
しとあつちりる月よよ森信民幼学をりてこころひそ
そよのいつくやまも人朗詠まかりんやと被作もれはりと畏て
暫もつとよそ色けりかをんて耳と侍ていつかろる言と
詠せんすん人と待りてよ極樂此尊と志すろ事一
夜とあやそまるとけり類あくめてそまろりきり此句書
きろ齋名てそ清法よひけりよ家句とてそんこの
アの人此朗詠まじりまるとけりいふ斗の心在中す

しりける此句の勸学会の時攝念山林と賦する序也

念極樂之尊一夜山月圓光旬曲之會三朝洞花欲落

是六三月十五夜事也九月十三夜詠まじりけるつとそ
但念佛の強しつとそ取らるるけりよや古人の不作作
而可信也

一條院四時越米國わろそまじけりと源國守藤原為時
共よ詠りけるよ山堂屋とやまじりけるよや國守は
わろまじけりよ為時熱つとそまじりて文と女房よ付く
てまじりけるよ洞云

若学冬夜紅燈籠市際月春朝茶釜夫在眼

帝の質として侍所にもあつた夜に御一入せ給く忠
骨をけりての堂屋の系給く園守と改く高野とけり
よけり

●後三條天皇の宇或武士佐藤赤宮寮の中として抗
射するよりして太神宮より所より奏聞より間
依議より隆綱宰相として筆と取く定文と書
其詞云

雖も飲羽之号も未見首丘之實

とありしよりして中将とありしをく兼字と給りし其
時の系議中おけりといふことありしをいへりし

忠道忠實

●法性寺南白河院東比院領池田莊解と朝隆の執事此と
取られしをいへりし中

冰營輕敵下之御威之兼又成梁上之奸盜

と書するのと質して此解亦と申すもの草はあり
す字生儒者此の書きするものとしていへりしは作られ
在官未は被らるるは暫は秘苑としていへりしを敵下は定也と
て向ふれば江外記康貞と申す者も強はしきと記していへり
了依し康貞と文敵は右加へりしはより此未文章は付

きりし面也

兵庫以仲正子

六孫王經基子

●頼政二夜ハ多田滿仲より来るとして武藏守其氏と繼りしといへり

和舟の浦波ををれりたりとく大西の舟護りてを
りりし千代村よとよものこ年とけりまのちけり
とるるよとよ

人志れぬたのちのこまにまらぬくのこ月を人らぬ
と奏して昇殿ゆりされあり

刑アサ補宗康子

三井寺寛讚僧正年高ケりくま儀とゆりされり
けり世路よ清く

山川のあかりとて沈みし海を恨みたる流し
る羽院とてめと河因梨よりされよあり

顯照法師細の望をけりよ

うらやみしるる人の思ふ人思ふららぬ法の精り

ゆくよとて法橋よあり

法橋光興子刑訖赤補忠定孫

伝光法眼

こころとらるる人思ふ人思ふららぬ法の精り

とよらとけり西園寺入道相國のひのこあり

まへ法中よりおされよけり

但馬守家長西宮守合の寄山カクとまへ

立向カクたかおのうす衣袖のちりあり

とよとてみおれ一階とく人思ふけり

中納言顯頼の息

別當入道惟方二條院の清乳母よとておあり

おのゝもろろあしく振舞ては白川院のゆゑに
了海よりあれは家して配下よりあつたれはけり
ゆゑに白川院のゆゑに配下よりあつたれはけり
うづらひとてゆゑに傳はして

此よりし洗ひとすは渡川おろりゆゑに
とてしてあつたゆゑに傳はして
りて思ふよりあつたゆゑに傳はして
りて思ふよりあつたゆゑに傳はして

後多相院清時定家公卿上人とありけり
りて思ふよりあつたゆゑに傳はして

また思ふよりあつたゆゑに傳はして
後成三
位此書を記すゆゑに傳はして

あつたゆゑに傳はして
定長朝臣も作すゆゑに傳はして

あつたゆゑに傳はして
やそ敵におはゆゑに傳はして

大倉院より宮北の門は女房よりあつたゆゑに
惟親よりあつたゆゑに傳はして
けりよあつたゆゑに傳はして

天曆安西院朱殿安 蓬子同教
大倉院より宮北の門は女房よりあつたゆゑに
惟親よりあつたゆゑに傳はして

けろい

神も日本を敵よあつたてはるるを告おつてあけり
とよかげろをばはるるを書院よもあれいゆらん
まけり

白赤天わち年春暮燿花鹿の具よらつてわく
あつてけろよえたおのりも家のまげろよまあつて
そらとけろをわろの將軍さうのまれい

這見^ニ人^テ家^ヲ花^ヲ使^テ入^ル不^レ備^ニ貴^ニ賤^ヲ親^ク疎^クと係^レ
けろよわて又云ま^ニあつてわく^ニ地^ヲと感^ル風^情也
楊海忠信う大隅もよと下けるよ郡の目よ頭白翁

もあつて答あつてあんとてまらとまれい

老^シく^テ雪^ノ心^ヲい^ハけ^テ志^ヲか^クま^シてい^ハは
とよとてゆかたはまらりあはのりれとあつて哥^ハ妹
宵^ノ中^ヲま^シや^リくら^ク妹^ヲる^るよ^しわ^て色^ヲく^テ親^ク是
と花^ヲ名^ヲの^使とす^たあ^つてあ^つて^ま今^員も^ませ^らと
き^らと^した^すと^まと^しと^ま其^性方^多る^へ

後撰集云あつての心とれ堂ととくくとつてあつて
わつてあつての神よつて

は^いか^ん隠^ぬぬ^ぬの^い夏^虫の^こら^なれ^ら思^ひお^ぼけ^り
と申^次 ^養玉^カ隣^はす^ま共^是を^まと^しの^あつ^て

キトヨウリトナクニシテモトヨクシ

柞此舟大和物語ハハツルル此子の故式初志の及こよす
給けろとねまの童女れおここみちを思ひけてはまの
童くろよとともちちよるまの神よつこてまらると
よあろとあつらふもよはは後成のえつられらた
凡神妙と云おハハツルルのこトヤ女子の童と
てともちちハ童男ののこまの神よつこてまら
とてよあろを思ひこてあつらふ人の云を
わらうとてははくの石目やわらうト中務ハ童明親
と極親トト早ナリ宇多女五宮と長男内親トトす

いづまの事ナリヨクハ

俗ハ中務女備定長

寂蓮トヤトナリハハツルル

思あハ神ハ童とつこてまらうと云ハ

とよあろ母心よ

任務物語ハハ二条者よつこつら男同ハ女の内
ハあつらてよまらるたつまわらけらよらた
よまらる人ト云ハハツルル思つらハハツルル
あつらんと云ハハツルル地ト云ハハツルル
と云ハハツルル

いづまの事ナリヨクハ

此身よりくわのよきりあへんを滅よの名の事とて
河内重如とハ山崎帛判官代と号す其ふいやくと
ものおちあへりきこむ女と思ひけりけしう一文を書
てしつてしよとてしつてしつて

人はしてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
其あてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
夜をあへりけりしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
も争ふとてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

そのあてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

和泉末初巻のしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
よてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
とてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
あはれしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
方とてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
そつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
まらしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
海軍しつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
とつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
あつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

小野信三守れた信よその娘と名けり文をりてしつて

西原直作

らむらむけりしむらむら

才非馬御彈琴未終身思風史吹簫猶拙

大臣是をいふて感して舞よわしとそり是よりお
かきまは

宇治入道殿よあつてひけりうれささそとささ
きわと願神けりさうけりよつれあつけりさ
送あり

あつてさうさあつてあつてあつてあつてあつて
入道殿さうせけりまあきよあつてあつてあつて
つうされけり

中院のち臣宗雅息
宗家大初云とて

宗家大初云とて神樂催馬樂うさひてささ
さうさう人おつてさささ方へ後白川法皇の女房を
りける宗雅將うさささしてはあつてあつてあつて
さうされけり

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

く入るるをけり

はついでにひらきよきまはるるをけり
女房の抱ひあつるあつとてさうして此舞をよめる
さうとてけりさうとてさうとてさうとてさうとて
とくしてさうとてさうとてさうとてさうとて
良蓮大守より依見修理守より入物よりさう
てさうとてさう

大守よりさうとてさうとてさうとてさうとて
三河も定基心はけりさうとてさうとてさうとて
しきよの口もさうとてさうとてさうとてさうとて

さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
来りしものをあてかへるはけりさうとてさうとて

さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
是をさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
つねとさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
おわりも家のさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
とてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

等歌遠聴孤雲上野皇衆来迎落日前
但此詩保胤作れりといふゆゑなり或説云此人也

唐土の嫁眉山は寂照と云けり此後成也師と信
門の義と論して其の務れやと思て入滅するを
けり其統よりして代生を遂と目すはせられざる
あか也入唐よりして其の嫁眉山の寂照は教は女七
不遠よりして人帝はヤげると人なるもあれはよは儀
してとける時より頭は光あつてきてみしけり
其縁ある法師の人なりしてとておんけりは東西は飛
る人いすははり西面はあつる人の時におとそ
せられた

おんがひをひらきておのりもれ西をを転むるは

とてありしけり其ははるる表も地を人らとせり
さそのよりけりなりなりとせりなりなりなりなり
成るれとも養徳よりして徳とてけ貴とてふむむお
古と教とる知多しあやのちのめそひくつて
も郡曲はすくれ和事とぬむおひもひもひもひも
かさも撰集とけりす其をよりあやもひもひもひも
亭子帝多養院とては遊をけりはあやもひもひもひも
とをんくもせられけりあやもひもひもひもひもひも
集九とて中はよりなりなりなりなりなりなりなりなり
とりなりは丹波の山剛多は白女とてなりなりなりなり

舟よるの世くむ劇し詩尋よきくもわらふ一か
也まむしうわらふ一か世尋よきくもわらふ一か
わらふ一か中を伴ふわらふ一か

もふふとわらふ一か世尋よきくもわらふ一か
此時帝をわらふ一か世尋よきくもわらふ一か
了まふ上達教位名をわらふ一か
間くわらふ一か世尋よきくもわらふ一か
くへまらりける時山傳よと別指しける所よと
命よと世尋よきくもわらふ一か
とよあらしげらなと集よとわらふ一か

君松道姫の後撰集は入神侍遊女官本の後撰集
とけりすまゝ夏の傀儡名安の詞花集よとわらふ一か
妙の刺古とわらふ一か世尋よきくもわらふ一か
人ねま太古今わらふ一か世尋よきくもわらふ一か
まゝの回集をけりす尋わらふ一か
神侍君と孫くら男よはらふ一か
海賊よあらしげらなと集よとわらふ一か
我ら何しよあらぬ人思ふ一か
と西方極楽のよらふ一か
ときひくうひて引よらふ一か

すえてあやとてふくしむるもしるしとて人かたむすは
しこかきまへんねをうらむく性中を逐てけり解脫
を何をもすすあふのしるしとて付て信をおこすま
るる

書二位は終要のしるしとて近付よけりた善念識の上
しるしとてふくしむるもしるしとて共回業也といふ
と思ふは時詩と一首作し人といふは善念といふ
る月とて極糸の在處也といふは忽ち形象の未與
形を起げり其機根といふはく上人といふくす
けり

猫回中約言光隆子

⑤ 近の寺の二夜家隆の八十とて天日寺とて終のしるしとて

七首は吾をよとて廻向といふは起ける條終心念とて其
志むかへりといふは其の一首

契わまはぬふりの里よりつらきとて波の合とておつらふ
寶目上人といふは人の善常れ古寺三首とて日行徳
縁してけり其意徳とて逐けるも其理不遠
まごりといふはけり人の家はゆかきとて善念由る
つらき曠る跡とつらき外付事といふはけり
むと思はるけりといふは文とて善念といふはけり
り

陸原流藤ハ其身征夷使軍監の武蔵よりの
くし文の方きくくぬりともありあつ時詩の藤句り
作まる

一文一武俱迷道道為我耶鄆歩漸窮
此人ハ忠文民部之將軍の宣旨とあつて將門追
討のきまりあつまへりける時付へりける駿河國
見の関つづのく海のものさよさうりける

漢舟火敷寒焼浪驛路鈴壺夜過山

と云古き詩と録しきりともれりあつ心すそ
將軍流落しあり此詩ハ杜荀鶴と陳江驛よる

作りける張宿の夜の思同心通りも人と思す

左馬次義朝息清和十代孫

鎌倉右大臣將父の子あや代に撰集し入給り

慈田法性寺

よさくもれん中にもちお都へ上給りける者あはる

用白忠道子

正何事と思へりあつとわすえんをりける

返すまよ

くらげのひそそあつたを思ひつる

とよめれり面白くきりよしとすや

凡武士と云ハ乱るる世と平くつる附是くと先とす

つあり文よりしるく優劣あり別家ハ文武二道

と分てたはれ廻とせり文事ありハ必武備の謂

也のりしるん唐も後漢武王本武將二十八公え
らひ定しし麒麟圖をもとて勲切とみるれけ
る舜帝の時八愷八元とふ付て十六族代文士をえ
らるれりし源順右親衛源將軍始談論語
時

職列虎牙^ト 雖^モ 拒^ス 武勇^ヲ 於漢^ノ 四七將^ヲ

學^ハ 抽^テ 麟^ヲ 角^ヲ 逐^ル 味^ヲ 文章^ヲ 於魯^ノ 二十篇^ニ

とて書つしける文武共りる心也又唐太宗隨の世を
取て政と定給ける時魏徵房玄齡等勅同し然と
て身文章創の二川とふかて文武のすしと退る事

とそ若志のひく方よ付て許ひりけるる兼の道ハ歌よ
向く勝負とありするのそよありすおむる方事よ
も甚任多のゆかた氏傳云買たまふ人くそら極
りそカクくくわけりしる本の女是をよくして三
年の間おひすすしふらとあれハ男歎恨もれん
ふんねらりあり野よあく遊対一のまきとよとて是
と給り其時此妻始くうらあそておえけるを人
高倉院四付四敷の上よ驚れ鳴けるをわしき事お
つとていすすしと云事とてえけるを我人頼みよ
いせらるるしわりあれんはのまむしとてらねるハ

より終りて修しつらき長く宣旨と書きて心
お思けりいひつらきまらぬを御座り候と
月夜を周知くぬる人ありていふは
ら若此真加つてより多きと思はく八幡大弁と
て色と結て矢を放つてつら根は是くけ
らりてかろきあつてつらあつてよけり
始くんて感歎しつらとわら後徳大寺は
時中純言とて縁をけりて思ふは
郭云ふともて井よあつて
頼政とてあす

らるる月のつらき

と有るつらけりつらりける

首養由雲外射鴈今頼政雨伴侍

とそ彼感けり頼政らとそ外の外は伝書をとつて具
しと持つるとけるをば人の同多れはり不え
てしと申行ひつら人をそつらあつて

羅

僧徒は勤まら八宗は修字一院改危行者法華
者等也大音後世の修因也といふ請ふ
はとせれば九云へて天竺震旦はとて

とらして弘法傳教を乞ふ智證の曰大帥と稱して
て菩薩和尚号と家号ありて類聖人指者のつくを
らうと振舞ふ其證多うれ共而して靈驗行徳山
の註しうし中々女と振おすよふ及管絃の
徳神感の例題よりのあるといふらうらあり事す付
て程すべし

●村上守三條中納言朝忠は初よきううひ多り養朝
成始く昇殿ゆりて小板女は作千一主上お召しり
ゆしんすりよ其良極くうくこけせり節を
ゆすらく千一人を給くこれ八月裏しうくくあり

吹きやうと形も忽ち美樂ととてかてけり

●白河院西位の何野行幸と云事あるそは後深野は
かり付て放鷹鳥樂とすうを節必て入るうそは
惟季の外は此樂と習儀ら有ありけり依り井
戸の次官ありしひいと云管絃者といはく惟季と云
ははくし由作をせられおのの装束ありて樂人か
あられはうしき面白かりたりと目此妻のうさ
事おのしきれ公衆人しおれよるをえりおれけり
五人光季高季則季成氣經遠と一人をうはり
あられはうまの子の末普と七年十日おるをり

飛人不^レとて像子男^カよる^レと如^レれたり^レ時の人面
月^カの^レま^カと^レし^レけ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
ま^カら^レる^レの^レの^レま^カと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
ら^レの^レま^カと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
第^ニと^レ川^ノの^レ園^ノは^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
は^レ惟^ニ季^ノ第^ニと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
人^ノ是^レを^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
は^レの^レ不^レ骨^ノ人^ノま^カと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
右^ニ長^ノ席^ノ題^ノを^レま^カと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
境^ノ近^ニ都^ノ城^ノ故^ニ無^ニ車^ノ馬^ノ之^レ煩^ノ

堀川俊房也

師房

路^ノ往^ニ山^ノ野^ノ故^ニ有^ニ維^ノ免^ノ之^レ遊^ノ

そ^レの^レま^カと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
ま^カら^レる^レの^レの^レま^カと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ

大^ニ井^ノ川^ノの^レ園^ノは^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
通^ニ後^ノ中^ノ納^ノ云^レ及^レ括^ノ遺^ノと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ

堀^ノ川^ノ院^ノ口^ノ村^ノ同^ニ行^ノ幸^ノと^レあ^レら^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
家^ノ村^ノハ^レ云^レ口^ノ門^ノ右^ノ有^レぬ^レと^レま^カと^レあ^レら^レひ^レ
席^ノ如^クと^レも^レ書^テ今^ノ人^ノ代^ノは^レあ^レら^レひ^レ

瑞^ノ池^ノ周^ノ穆^ノ之^レ昔^ノ策^ノ駿^ノ馬^ノ而^レ無^ニ前^ノ体^ノ
汾^ノ河^ノ漢^ノ武^ノ之^レ秋^ノ携^ノ佳^ノ人^ノ而^レ不^レ能^ニ忘^ノ

ものゝ誰う書ゆへにこそ天宮へ申す女御旨のしに
府こそその独りこそ給けり此句は同席也是をわく
國成た府よとせ合せりり時和哥序躰にあつす
詩序よのりもとよりも我詩序と不可書我和哥
才学と此時うこそ人と思てこそ言給けり

帥の御信信息

○基綱の年をけり後帥も成て下りけり附白河院年

高くおきて遠く越く心はくお月より午は此秘事
物と誰より侍人をけり守名とくへに事也といひ
ものつ後重通物もぬる侍へも侍も其器よると
す物もハ孫といひ小女も秘事の座と拂てあらんと

て侍りてのよふに事ありぬるをいへとて下
よけるも其はほく〜とあらぬ物もハ此旨あり〜とく
そ為さけると思ふぬら小女もく比巴と守る事
ももあり〜とをりわもハ物〜と魚の獲き〜とく
此もハ〜とま〜と合〜と二箇とて敷をつ〜と
印〜とてけり〜と〜とありや〜と〜とていひ
ら〜とありもハ比巴川の青信思〜と〜と表物りけり
此小女ハ尾張高階為遠く其時輔のしもめの版也はり
待賢門院も集めて尾張とていけり年をけり後
左も殿と大承〜と行けり二条院の所侍のさり也

後白河の御大納言信重の御

まづも巻紙をばてはかりあねいといふやうにしてとてふゆとて
まづつはりつけやと此尾法女房として着りつけの時よの
心もく止観も人志もくありとてこめれ童一人と具
して大糸の良仁智のりりけりつておひまけりて時
さうくのやと来迎院へまづとてつけりて例時の程
とて空室の房よ入とて例時とてありんとてつけりて
廿房心中と思ね深く学問の志もよとて成とや
つしてく常よ指りよ志とありねとてお給事と
れりもれとて存の思もよとてお給事とて
まづとておひまけりてとてお給事とて
とてお給事とてお給事とてお給事とて

とてお給事とてお給事とてお給事とて
障りもつかわさくありとてお給事とて
学問の退心とてお給事とてお給事とて
お給事とてお給事とてお給事とて
お給事とてお給事とてお給事とて

甲 十月廿三日わ月あつらひける夜寝信とて家とて在後家
心政長別古院六波羅寺別當禅慶長慶樂人三四人宰相お
隆細管絃者よあわらねてすといふとてお給事とて
後那とて各車よ乗て五節命掃世を背てお給事
後那の家よ行よとてお給事とてお給事とて

まはねをすくあつねる水のまねよとくけり月志
三すのむすてふまひしこよひそめ乃ん状とく一もた
いりん一すう地のまきまより消も心すともわ枯凡
楽ニ反奏合らるる川へて萬林樂は序より五節
てまげり小浜柳とさぬ人柳一此うら後明何事よす
るく柳のさうもれハ太目のが柳といふんけりをこよ
ひんく一橋もくく神を志わらんり柳と隆綱後
明ちよまく舞けりし樂終つて院禪度禪柳よ
柳子と川宗後つあーの屋公琴と川經伝ハ長後
比色と川く渡よむせひく樂の時ハ橋れをるよあ

ア後明よもんと目かれとすうまてあつとまやす二の
ある一ハ五席の命婦と藤景敷の女侍の女房柳や
あつとすうめのと柳夕琴をさくま柳るらとあつと
そのつらとわめと柳すすうと表さうとまて渡をおと
す後んをとけり

朱蔭院女侍分川右存頼家

④天治二年八月十日余の比依人の齋宮野宮より一由
志げり群りも通く成ぬとて中雅定大相国雅實子 輔仁親と申す西門右大臣花園内大臣
柳とさうと人く柳よ系會一をりけり夜更ら柳よ
月のみまぬことんすくあつて名あややんぬ柳と
あー女房筆と丸着やうくあつ合てうとすを川

のしむるも下はゆく威の佐勝すて誰の思ひとす
つと打礼きくつ西遊のこころもや云かきんかまも
ておまへとしてたは信催馬樂とてつひに内宮の色にて
らむもの此れ華のひよき入つてきつたはまのつとく
す樂も敷とつてくけつたはひよきはまのつとく
つとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
すつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
すつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
すつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく

④唐國は衛靈公と云人晋の國入り道は濮水と云所
やしらとくつたけるよ夜更かやとよそむ杯徳草枕と

あもつたつて水の急は琴を引音とつ消と云人
とらと此色と琴はもようつて其は晋年と云の
よあつてつとくはまのつとくはまのつとく
あつてつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
國の色也昔師造つて一段の付の摩く樂也武王討
と討つて師造つて水は洗つてつとくはまのつとく
色とあつてつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
きつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
の樂とつてつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく
者皆以流をのりすつとくはまのつとくはまのつとくはまのつとく

いふをららげ顔と人々く儼々舞々人々もれりや
いふをら

④唐玄宗の帝年以月をあらする志原して夜々む
りく志原中ゆるりけり道士是を感して帝は
夜君月と志原中久月中と人々もれんと奏
しきん帝はく酒始道士八月十五夜此月の午此
時くらり夜はく桂の枝と月に向くけりあめり
つとめれ銀のきり鶴月の宮よつとけり也時道士
是もきく川もり岸もりけりよけりかたけりすして
月中は入るねむれ言殿は樓閣敷くす舞臺の

よま十二人の妓女よ各白衣とて舞をまの志原のす
たのころよすめんむをうとすめんこ一帯とあり
らす袖をねりけりけり二階の言敷をりけり
こころむとて目もあそりなすむのすれと
わけく二人のわりしををあらすくおの言舞の
すく志原の志原とて心及流りけりあめりえとら
ねくお月をけりけりけりけり舞々をえ
もすして酒始よきり帝は曲をすりてせり
りけり盤渉酒の志原り霞裳相衣と云すね
りけり是れかり中をくけりけりけりけり

始終もれこ樂也といふは但此事か月つり解りたさ
月詠しも雷震羽衣壹哉詠の樂也本のみをえ
壹哉遊羅門と云けりを同帝の時天竺二年中一
よのみをひめて雷震羽衣と名く終つて為

④同帝月の夜第吹給けりよ其色龍の鳴りつる御
者之をよめて龍の泣ると思て心は龍の色とじり
符と作く是と封して今其時帝像よとす
といふことせむくえ吹給けり言中一とて勤く幸
世の中へえとく天下の愁なりきり是を彼佛者ん
すて家佛のちる一ある年とこころを符と彼

りしげは帝印のあはくは成給よきり是よりとほ常
の徳よりけり給けり来りあるはけり

⑤孟嘗君のそりよあはくはとておの長とあはく
けりと雍門と云人よりけり琴と月の中人涙をおさ
すことまふけり老の云雍門とく琴と月た家へ年
ぬんことくひをせけりよ世人中のと常と云はく
けくゆりよあはく調をうと合をくゆりその色と
らさるよ涙けりまけり家士賦序は陰士衛の書り

落葉 侯微風 以隕風 以蓋寡
孟嘗 遭雍門 而泣 琴曲已未

又攝在列、お家の後友よとつり序代子孟嘗君を
樂猶泛旌門之微琴、と書り是也

秦穆公の女嬴玉ハ、くろの如く、簫とを、周靈王
太子王喬ハ、ぬく帛と吹成、風よ付ハ、或ハ鶴よ、
もろく、如く、仙と、如く、まよ、りす、く、糸竹の
妙る、ろ、く、治世よ、ろ、く、佛事、よ、如く、す、ろ、く、臨
治世音と云事、と云言、作

雲調黃德、斬去遠、風奏南薰、舜道典

唐高宗、右則天皇后の書、如く、
皇禹、聞泉臺之聲、遂登仙錄

帝軒張洞庭之樂、早叶、真源

切、ま、音、樂、と、ハ、仙、家、人、中、く、教、え、佛、土、天、よ、ま、
と、ま、す、と、す、と、ろ、く、ま、ろ、く、此、ホ、管、絃、ハ、德、と、ま、ろ、く、

④行成ハ道凡、
上人の法殿、上、と、扇、合、と、事、ま、け、ろ、く、珠、玉、と、ろ、く、
金、銀、と、ろ、く、て、家、を、と、ろ、く、如、く、如、く、け、ろ、
は、ろ、く、ぬ、ろ、と、ろ、く、細、り、の、ろ、け、と、ま、黄、ろ、ろ、
ま、ろ、く、樂、府、の、要、文、と、真、草、よ、お、や、せ、ろ、く、
て、お、ろ、ろ、も、お、ろ、ろ、と、是、と、ろ、
ま、ろ、ろ、も、お、ろ、ろ、と、是、文、札、よ、ろ、ろ、け、ろ、
の、録、よ

柳中納言行儀子任房とておつりけつるいささか書り

多り春日大明神乃未現よりりくすしんは佛經藏

と云額とて取つて置くはそつとけりて思ふおる

き經藏するは六つあつたあつてあつてあつてあつて

よ柳もうせ給ひては遠く年へくは思ふの外は公家

しつと此社は一切經と安置しまつせられけり時誰

り額とい書つていふはをけり此柳の子孫の中よ

つりつるまゝとては柳のそつとけり額とてそつと

おつれりるをうつてそつとけりはそつとけり

けりま事とんりておつてえり者依理の太貳ねりて

このおつれりるをうつては縁國三為明神の託宣とて彼社

の額とい書つてそつとけりてそつとけり

④成通二年は鞠と好む給り其使つたりよけんあつて

一のまゝらりし給りつるの柳の枝はあつてそつと

とつとゆひそつと小兒年十二三計とてまゝ色の唐装束

してつとつとくつとけりてそつとけり何事とて好む

と好むの座と極めておつてのまゝとあつてそつと

しそつとあつてけりてそつとけりてそつとあつて

しつとあつて牛毛のそつと得者の鞠角のそつと

太宰大貳資通は縁國よつとを好むとけり上はそつと

入りの事一人は掃きてとけりし掃き事おくりけりしこ
とけり念珠も口ずく毎日持佛堂も入る佛宗も此
巴を引く人よねをさくさく走を廻向しよのりけ
りしよ心よちりるおくりけりしとれた帝より玄象と掃
りしと引けりよいとちくへえさるもあれは濟政三位是を
中して玄象と服よけきといふれけりしはよは資道
の弟子經信やちくへえさるもあれは濟政りち事ありしと
し其詞のめをその時の人云けり是ははくくの未だのわの
事よちあつちつわしは玄象もは唐れは巴の柳劉次
席つは巴也深草の帝は河掃部頭貞敏り唐へ伝へ

ては巴羽のりけり付りは也此系標れ甲のつらめわさしとを
わつしはまえ唐人の伝口ずくも基綱の大貳はいんれけ
り或人説云玄象ハ玄上宰相中代言諸高子のは巴也其まはれ名を付
るよしりて玄上と書つしと事しともは唐人の比巴
とわしきらし撥面は黒つし象をりけりよしりて玄象
と云ふそ昔より靈物として中裏鏡亡の時人のもとを
おさぬ常よおあくとる道のしゆくのみれ来しそわ
けり或附は来蓬門の鬼よわすまんをりけりし是を
来りんきらし修法行りなめれは門の上より頸は法
と付くわらりりりしとて傳へりしと世よはの

道よつゝぬ人のんとすまひ必さうりむらとらつて比巴の
秘曲よ上玄石上流泉白子揚真操咏木也是と云
付て胡渭別三曲とハ云也比巴のクね思玄象牧馬并
平渭楷木繪元興寺小琵琶無名是ホ也クね付て
皆子細あまてと畏く

四 鳥羽院内十樂講の次は遊をけると夜更らまゝに
常ららしむりらりけまの教急刑アの子共を
季行ゆゝひ筆公筆吹くひけら常のまらつて
此下調子の振ねる物を同音よ吹合するけらと云也
の音とらめて耳とくくふけあはれよ成人常と

胡老子と云樂と吹合とらけらよらりてまらめてけるひ
ららと小調と云秘曲と吹んとするををらつてお
とをさやうとらつる世の秘りりとも成人やける秘の
應よひやの節吹とさる不是やせらつてとらつて
是ハ管絃の道とよくめよりてわらつてと云也すん
と云也ぬらとらつる世の秘りりとも成人やける秘の
顯基つせと通てと醍醐よらつてわらつてとらつて
醍醐乃大僧正比巴の二曲と云けらよの法佈よ引く
とらつて人々よあつてとらつてとらつてとらつて
つゝとらつて人と強よいんれとらつてとらつてとらつて

大納言俊賢子 高明孫

後入らば池へ始事ありと云くありて時三番始りてこ
とくく是を引僧正と云くすてありひきまをくして
あられ花園より消てくら月くら法師の松樂のあ
まらここのことして引僧正のさうと云くも志をその
曲とく傳へ給ふぬよと云れたりとくつあり
るくしての事と云くことしてありてさみよなり楚山と云
するし玉撲し良工よと云くまらなり相なるよと云く
故と云ける麒麟と玉良薬よありけり同はと云く
そつひあれはつらなり秘曲なりと云く實よす云くはらんそあ
よはらぬと云くまらなり故廣法僧正の理真真言に
寛朝教實親の子

○

醍醐の梅會よ昔舞ありらるる年をける深蓮と
云僧正時おぼるとてみめしすられと云く舞しと云
よ揚きてみしけりと云治の宗順ありと云く思あま
つげらるるあり日おぼれりてへ云つてけり
昨日見しと云くこの池は神おれて云わたりありて
お將云返り

わきまをすく池の影をれ消れぬと云くあり人
といふら時よと云くことあり

六通花馬頭顯定子
中院僧正りおと云くまひけらる是と云くつと云く

りて因入道志存し對面の次は此事を詔お給てわう
くそそ是く作ししとあれは入道教尋はわわしを
給りおとの給けりしとまてくわのわうとてかた
り宗順あさりしつりしはりよ

一 されよしよそ神はわわしとよあちよ少お云
くしうしよしよそおれもれ

とびしして作しとわらわ給けりよきくわてわうく
おれくれとさくくわのわし佛のわんしよまお給けり
事わしよし悉給けりしんすらわくわうしけりし和
尋の道は顯密を法の碩徳よししはりしと中

教惠通子

法性寺

くしとさくくわ同僧はわき大首の遍照との是志
わしよしは給はらとけりし九高き後こ心のわんあ
よ付て然しつりしよまてしよ也之能の人のわわしつら
らるるるしえわんしよ布袋和尚の十善畫とさ
給ら中は文武不侵心よまき言とわらし和尚の跡
勤の化作わし

⑤

柞人維和尋管法務をさうした才幹の愚う小
風月のけねまはけあかつりしはりく
笑也

唐太宗の長王桂申云人臣賞ん学業をまねん心賢

れつとて人共首の云は古の振舞と云うす山皇太
りつ任を月と云ふんやと云故は模秦なりと云
と云く賑と致馬して学ひ書けハ道と云ふれて外
凡そして勤めけり又太宗ハ貞觀三年よ治て
孔子廟堂と云ふく周公且と孔子と云ふ先聖と
して顔回と先師とせつ是文とありく一さま
る方故也然列史書令經と云学ひとつし詞花翰
崇とてそ一おとて舊記と云くわす古と云ふを
不他して君道とて皆ん徳たせん事實の至
要也但又次と云ふの人の云はるるは徳と云ふす心と云

のさうく一と云ふ世はあり道と云りて第一の徳也と云く
の徳と云ふもあつて心と云ふのさうのさうの事也と云ふハ相經
一と云ふ盡意相と云てと云りよハ但貪福と云ふ
あつてと云ふあり

た大信師手是

兼附子

⑤ 小一系は古將濟時この年代はありとて宗綱に
師綱と云人ありけり白川院は住人けるせらる才幹
ありありあれ共編よと云はるる一とて私をわつと云ふ
忠臣りらよとてと云くはつうれけりと云ふと云
けん陸奥守よありと云ふれよあれハ故國よ下て換汪と云
りありよ伝史の那月とて大庄司孝春と云者是と

妨げいひて國司宣旨と節となくとて遠人等
るにいひよき春ふせといひていひよき誠は共じ
るもの同合致なるに國司あは人あはしむ事
國司入よりのりて好して事申を在國司基衛
とて此事申すといひていひていひていひて
わがときやけとていひていひていひて
基衛とていひていひていひていひて
るよと命よといひて宣旨とていひていひて
ぬ此上のいひても遠勃のいひていひていひて
頭を切ていひていひて國司のいひていひて
いひていひていひていひていひていひて

承いあつていひていひていひていひて
とていひていひていひていひていひて
取れいひて國司のいひていひていひて
よけいひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひて
思思始りて基衛つていひていひていひて
季子とて頭と切ていひていひていひて
く是とていひていひていひていひて
かりといひていひていひていひていひて
夫事とていひていひていひていひて

らして家毒女とあましくしよと馬をとりてしよと
多の金執りて羽絹布等の賤物をりせしめく家え
あつたゆくと孝子春の命とを請うせんともは國司に
りて(やう妻女目代とくしてみて孝子春の命をわすれ
便りやうと詞をつくしてひらふはなう命とをいけき
目代執りて國司大に服立く孝子春國民の命を
くはとの僻事とあつた家毒女背子(幸史あつた
あつた其科すとよ謀るよとてつて賤とをいふつてお
まめゆかり人幸史のよらん其恐る多一人の請
又くくくくは幸史よりつてつてつていんげん者

般討の西伯とくく入るるけつよ大顛國友のそりて若
馬下室をよつてゆりよそり是はそれよしよとつて
けし其妻やうのくぬよそり其後檢非違使所書
けしと實檢使は指遣りすよとつて其働カ不れお
くく孝子春并子りる命申す五人の頸と切て多りはて
しと國司とつてつてつてつてつてつてつてつてつて
命を助んごめよ國司は贈石の如く一萬石の金を
さつてつて多の賤也殆當國の二任の土貢りもつて
きつて是と入給りてつてつてつてつてつてつてつて
めつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

わらうしけりあつりけり六國併りしと隨らく思ふは
よ行ひくるとま務威應そとの國司よりしこよわ
あつりたりはよ志するていこく清威をけること
昔秦昭王の討孟嘗志重きことあつりしと流るる
ろくしけりよ其名幸始とすし終りよ抗白表衣
もよつて命いさよそりころすことあつりしとわ
何の賂もあつりしとあけりしとわいさひおが其賊國の外
あつりしと皆その心るるころすよ名れ欲の厚くすおるる
ぬきのやりのあつりしとわいさひ國上の名官とい成始り
そいあつりしと義家朝臣の陸奥守より向の討子細

て家働武働をまげりよ今も義光の席お孝ま
顔の節の中よいしとわいさひお地金と不ぬして是
けりよ何よあつりしとわいさひ始りしと是等あつりしと
しとわいさひよ不ぬしとわいさひの實より孝ま前
幸使りしとわいさひのちよき事よけりしと團司師綱被
下付山林房免遊と云様樂修よりわいさひか八南都
の悪僧よてまげりしとわいさひ武勇と事とわいさひた
しとわいさひりりり合戦の日宗と是とわいさひりりり
地界してあつりしと孝春りりりりりりりりりりり
まこといしとわいさひは頼とあけて後れしと入りりり

とてつれなく海をよけりよ國目を叩て山陣房の
是邊を改く先陣房の是了とて付つるけり
此のそり是をすよ惠心僧都の付せ要集よ人の定
相あり論と引て陣の内軍乃劔は動してつり水
上の月れ波の動靜よ如隨と書ぬるこも理り
アけきと思わくは是彼傳もさすりよ始り
もよけんともてと思はれけり一柳孝吉國司
つらつら國司と村よ半粟科改よ遠勃の有也
もこのゆりさるるさるるも國司れ法原もさる
章條のさするる也

●朝成は換進遠受別當、対中細々と所改の同存法水
よ指家陸邊百人、類と切有也其功勞よさりてと
度、關は群任すくと申りつると旨と志められぬ
群よ云吾群殺せを禁ぬ一放せよ宗とてま
かすり幸つ此申とすり哉とて朝成市と云殺せ
よは禁ぬの上は元宣の文明也但群れ託宣の事は
為國家の臣恩者おまの対進此限と付の事
衆猶可りき群よ其旨と令りるこもさるる
よは軍如此の自業自得の類ハ誠ハ憐愍のみ
よありはるへ一然而大紀云不即討ち急と

丁惣軍は成よけり

④後冷泉院の御源中紀を經衛に檢非違使別當
して十五年にして使庭と行りけり或時其獄をく
奏上ありしとて大改は獄者よりりるを一けり
時檢非違使は犯人を可むるにせられ別當の
けり帝のあつらひをす同其御出よりて禁裏
事人のあつらひをす天の志くまひるを
そつ其せめと通れん許しあつらんを
申の火をくは随て犯人をわけてあつらひ
夫よりすえ也よし勤くは通れん終は不
す

さうしやげ死をり其別當は獄を
の音年よあつらひはけりて監終も
より其の重資御決固とて中紀を
かりしとて其末は是又法の理と
帝は慙愧をり心のやと罪深く是
廷尉の職と許してつらとを
けり又公理誰とて犯人の
て凶悪事ありやとてあは
つらとをりけり此の志
る其の思ふとて衆業に因り

ずらく慈悲の利のうらうらき、輕く對つこの世は
 此定まるといふんは疑ひなく、亦の世に不窮して其
 報の心やよきとく、い志のつめ世のいふとら
 一とまきく、い其衆とめ、めらわん、半編の律の
 ろう一著、慈悲のうらう一、禁國のよめ、櫻とまき
 らうして、い下れ、うらうらう一、給けん、世は、越、うら、
 ろう一、又、高王の、い、衆を、め、うらうら、天、下、
 ち、め、うらうら、行、ん、と、ま、い、ん、く、い、う、い、
 衆、よ、か、う、ら、う、ら、う、と、時、務、集、ま、い、
 又、よ、い、又、高、王、の、衆、よ、

ね、く、い、う、ら、う、ら、う、定、世、又、股、成、湯、の、
 仍、り、四、角、の、編、三、面、と、う、ら、う、ら、う、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、

白河院の、い、の、
 幸、せ、う、ら、う、ら、う、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、
 又、い、ん、へ、衆、朝、ま、い、ん、い、の、

心々 公のいせ中をすたるは龍行若史の
達は流れてさしゆくはよこらぬ千の如き八尋の
りくれてくるき月日ぬるをけりしとよみ詩の
水は返り事ゆへ流年れ流しと作法文よ人の命
不停過於山水よまやらんまののまよこらぬ
る一書をよよれくこおむのそ家世し人の
とそくわゆるらつたのやと好む六のる筆の
まといつてけのあつてんれんとあつてい
こけくは有えてらん

元禄六年九月十日

書林

花蔭 江府 勧道
村上 源
難波 平野
野 平

